

2022年(令和4年)8月29日

ガスエネルギー新聞

CN都市ガス導入拡大

横浜に続き3工場で検討

佐藤渡辺

舗装資材の製造・販売などを手掛ける佐藤渡辺は、自社工場へのカーボンニュートラル(CN)都市ガスの導入を拡大する方針だ。4月に横浜合

材工場(横浜市瀬谷区)の乾燥炉で使用する都市ガスをCN都市ガスに変換しており、燃料をガス化している他の3工場でもCN都市ガスの導入を検討している。同社の主力製品であるアスファルト合材は、①碎石、砂を乾燥炉に投入し、乾燥・加熱させた後にミキサーでアスファルト、石粉と混合する。その後、②合材サイロに移し、160度程度を維持

した状態で貯蔵、③必要に応じてトラックで運搬する」という手順で製造・出荷する。乾燥炉で使用するバーナーは重油、もしくは天然ガスを燃料に使用している。

佐藤渡辺は、政府の方針である2050年のCNを目指し、脱炭素の取り組みを進めている。横浜合材工場では年間60万70万立方メートル程度の天然ガスを使用しており、CN

都市ガス化により年間1500ト程度の二酸化炭素(CO₂)排出を削減する。6月には太陽光発電(109キロワット)を導入したことで、工場の系統電力購入量を年間6・8%削減、CO₂排出量を47・7ト削減している。同社グループのアスファルト合材工場は、全国に11カ所ある。このうちバーナーの燃料をガス化しているのは横浜合材工場のほか、町田合材工場(東京都町田市)、小牧



横浜合材工場は乾燥炉でCN都市ガスを使用している

合材工場(愛知県小牧市)、幸田合材工場(愛知県幸田町)の3工場だ。これらについても、ガスの供給事業者とCN都市ガス導入を協議している。

合材工場のCO₂排出の内訳は、乾燥炉が6割を占め、3割はサイロほかで使用する電気、残り1割は構内で碎石などを運搬する重機の稼働によるものだ。佐藤渡辺の神野稔久執行役員製品部長は「CN都市ガスの導入により、全体の6割を占める乾燥炉からのCO₂排出がゼロになると、脱炭素への貢献度は大きい」と話す。

ほかの7工場では乾燥炉の燃料に重油を使用しており、近隣にガスパイプが敷設されていないため、現状では天然ガス化を検討していないという。